

牧口常三郎と郷土会

内郷村農村調査の参加者とその成果
塩原將行

一 はじめに

大正七（一九一八）年八月十五日から二十五日まで内郷村で行われた、郷土会と白茅会はくぼうによる合同農村調査は、日本で最初の本格的な農村調査といわれている。しかし、これまでの研究においては参加者が確定されていないように思われるので、それを明確にするとともに、同調査の成果についても検討してみたい。

二 内郷村の概要と調査の経緯

内郷村は、現在の神奈川県津久井郡相模湖町の一部で、受け入れに当たった長谷川一郎は「部落は十あつて、戸数が三百七十二、住民は二千三百三十人⁽¹⁾」と書いている。村は、若柳、寸沢風の二つの大字から成り、若柳、奥畑、阿津、山口、鼠坂、寸沢風、沼本、道志、増原、関口の十の集落から構成されている。

この農村調査は、新渡戸稲造と柳田国男を中心とする郷土会と、柳田、佐藤功一が発起人となった白茅会の合同調査として行われた。

郷土会については、大正十四年の柳田の『郷土会記

録』緒言によれば、「郷土会の創立は明治四十三年の秋であつたと思ふ。郷土会と云ふ名称は、最初からのもので無かつたが、仮にさう呼んで居るうちに、次第に親しい言葉になつてしまつた。自分の処には第四十回頃までの記録しか存して居らぬが、少くとも大正八年の末までは続いて居た筈である。其八月に大挙して、津久井の内郷村に研究旅行に出かけたのが、たしか第六十何回かの催しであり、後に又報告の会があつたとも記憶して居る。新渡戸博士が大戦争の終頃に、外国に出て行かれたことが、会の中絶した主たる原因であつた⁽²⁾」とある。

郷土会の例会では、主として東京近郊の各地に探訪の旅に行くことがしばしばあつた。

明治四十五年六月 原町田

大正二年三月末 野火止、平林寺、清戸、田無

大正二年十月 二宮、松田、秦野、大山阿夫利

が、記録に残っている。

白茅会について、参加者の一人である今和次郎は、「大正六年に柳田先生と佐藤功一博士とが発起となつ

て、我國の古い各地の民家を保存する主旨で『白茅会』と云ふのを作られた。私もそのなかまへ入れてもらう事が出来て、そのときの会員は、石黒忠篤さん、細川護立候、大熊喜邦博士、田村鎮さん、内田魯庵先生、木子幸三郎さんであつた。大正七年まで続いて各地を旅行し『民家図集』埼玉県の部は会の仕事の記念として、残されたものである。白茅会は大正七年の夏『郷土会』と合同して更に長期の旅行を企て各々分担で研究したことがあつたが、そのときの私の報告体のものは巻末の内郷村の調査である⁽³⁾と記している。このうち柳田、石黒は郷土会員でもあつた。

内郷村が、農村調査の対象地になつたことについて、柳田は「相州内郷村の話」で、「全体最初に内郷村を選定したのは、一つは地形、即ち一方の境は高い嶺、他の三方は絶壁を以て川に臨み、近年まで橋も無かつたと云ふ孤存状態と、第二には、村長校長其他の有力者に、同情と理解が有つたのが主たる誘因で、実は此程迄に文書類のよく保存されて居る村とは知らずに出掛けたのです⁽⁴⁾」と述べている。内郷村は都心から比較

的に近い土地でありながら、人手の加わっていない土地であった。次に人脈としては、柳田が、内郷小学校長の長谷川一郎と知己になっていたことが大きな要因であった。長谷川とは、大正七年四月二十七日の貴族院の事務局の慰安旅行で津久井の大垂水峠を訪れた際、面識を得、五月十九日の津久井教育会の一行と三国山登山に参加し再会している。

さらに、内郷村側から受け入れの理由として考えられることは、古い村にありがちな、よそ者をいれないという考えをもたず、進取の気性を以て青年を育成しようとしていたことがあげられる。その中心が小学校校長、長谷川一郎であった。彼は、これまでも教育講演会を開催し、明治四十一年には、東京市長尾崎行雄、明治四十五年には、志賀重昂、田中阿歌麻呂、小林房太郎をこの山間の小村に呼んでいる。⁽⁵⁾村長の押田未知太郎は、長谷川のとこであり意思決定もスムーズにできたと思われる。

三 調査参加者

ばち民俗懇話会

e. 大正十四年 小野武夫『農村研究講話』改造社

f. 昭和四十七年 聖教新聞社編『牧口常三郎』聖教新聞社

g 1. 大正七年八月十日 東京朝日新聞

g 2. 大正七年九月五日 東京朝日新聞

この中で最も注目すべき資料はcである。cには、分担分野及び早退と遅参についても克明に書かれている。以下に初日の八月十五日に参加したメンバーを◎で、不参加者を◆で、遅れて参加した者を◇で示す。なお佐藤功一と今和次郎の二名は白茅会員である。

◎柳田国男(沿革) ◎草野俊助(天然と土地) ◎正木助次郎(天然と土地) ◇石黒忠篤(農業その他の生業・

二日間のみ参加) ◆小平権一(農業その他の生業・米騒動の対応のため急遽参加取りやめ) ◎小田内通敏(衣食住) ◆小野武夫(社会生活・家庭の事情で参加取りやめ)

◎牧口常三郎(教化及び衛生の予定だったが、交通策を調査) ◎中桐確太郎(教化及び衛生) ◆中山太郎(俗

松本三喜夫の『柳田国男と民俗の旅』の中の「内郷村への旅」⁽⁶⁾は、内郷村の調査についての詳細な研究論文で、最も参考にさせていただいた。松本は、以下に述べる資料、d 2とeを比較し、「参加者が必ずしも判明しない中で、二人の記述に共通するのは、柳田国男、石黒忠篤、中桐確太郎、小田内通敏、正木助次郎、牧口常三郎の六人であり、彼らが実質的な調査の実施者ではなかったろうか」⁽⁷⁾と述べているように参加者の完全な確定を行っていない。そこで、松本が使用しなかったと思われる新資料も加え検討を行い、参加者を明確にしたい。資料は、次の通りである。

a. 大正七年八月二十七日 東京日々新聞

b. 大正七年八月三十一日 横浜貿易新報

c. 大正七年十一月 小田内通敏「内郷村踏査記」『都会及農村』大正七年十一月号

d 1. 大正八年一月 長谷川一郎「内郷村の農村調査」『神奈川県教育』第一六四号

d 2. 昭和三十一年 長谷川一郎「内郷村協同調査の思い出」『鈴木重光先生古稀記念文集』ひで

伝・未参加) ◎田中信良(交通)⁽⁸⁾ ◎佐藤功一(建築・

帰京後入院) ◎今和次郎(建築) ◇中村留二(事前に分担が決まっていなかったが、農業その他の生業を担当・

三、四日で帰る)
◎と◇を合計すると十一名である。⁽⁹⁾

資料aには、cから石黒忠篤を除いた十名が記載されている。

資料bはcと同じ十一名が記載されている。

資料d 1には、郷土会員、白茅会員名と肩書を掲載している。しかし、内郷に参加できなかった人も入っている。郷土会関係者では、新渡戸稲造、三宅驥一、小平権一、小野武夫、中山太郎の五名が、白茅会関係者では、田村鎮、大熊喜邦の二名がcより多く記載され、合計十八名となっている。⁽¹⁰⁾

資料d 2では、cに小野武夫を加えた十二名となっている。あわせて、参加予定で不参加の者として、新渡戸稲造、三宅驥一、小平権一、中山太郎、田村鎮、大熊喜邦を挙げている。⁽¹¹⁾

資料eには、「名前を悉くは記憶していませんが」、

と断つて、柳田国男、新渡戸稲造、石黒忠篤、木村修三、那須皓、小田内通敏、正木助次郎、牧口常三郎、中桐確太郎、小此木忠七郎の十名の名前を挙げ、「此等の人々からは、日限を定めて、各調査項目を書き出さしめ、其れを集めて整理するための委員として那須氏と小田内氏と私とが当らしめられたように覚えて居ます」と書いている。小野は、七月二十八日に事前の打ち合わせの為に柳田と内郷村に同行しているが、母の急病の報に接して帰国し、調査自体には参加していない。eでは誰が参加したのかという記述はない。また、郷土会の準備の様子がわかるが、白茅会のメンバーについては全く触れていない。

資料fには、今和次郎からの聞き書きと思われるが、柳田国男、石黒忠篤、田中阿歌麻呂、小田内通敏、佐藤功一等々十二人としているが、田中阿歌麻呂(湖沼学者)は、田中信良と混同した誤りと思われる。¹³⁾
g1では、新渡戸、三宅、草野、柳田、石黒、小平、田中、中桐、正木、田村ほか数氏としている。
g2では、新渡戸、田中を除き三宅、草野、柳田、

を含めたのではないだろうか。長谷川とともに受け入れにあたった鈴木重光も「十二人」としている。¹⁵⁾本調査に参加したのは十一名であるが、事前調査も含めれば、柳田国男、小田内通敏、正木助次郎、牧口常三郎、中桐確太郎、佐藤功一、今和次郎、草野俊助、中村留二、田中信良、石黒忠篤、小野武夫の十二名が内郷村を訪れたことになる。

なお、主たる受け入れには、長谷川一郎、弟重一と鈴木重光の三名が当たった。

また資料eでは、郷土会考案の村落調査様式が紹介されている。調査項目は全体で十一項目に分けられ、さらにその項目が細分化され、内容は次の通りである。¹⁶⁾

- 「第一 沿革及住民(十二事項)、第二 風土(十三事項)、第三 土地(十三事項)、第四 交通(四事項)、第五 農業及其他の生業(三十三事項)、第六 衣食住(十六事項)、第七 社会生活(八事項)、第八 衛生(四事項)、第九 教化(十二事項)、第十 信仰(五事項)、第十一 俗伝(五事項)」

次に参加者の当時の肩書と、その後の略歴を一覧に

石黒、小平、中桐、正木、田村等としている。g2では、未参加が明らか小平を入れており、正確な取材によつて書いた記事とは思われない。新渡戸について、d2には「旅行先より参加不能の電報を頂きました」とある。

この比較からわかることは、a、b、c、d2で共通するのは、「柳田国男、小田内通敏、正木助次郎、牧口常三郎、中桐確太郎、佐藤功一、今和次郎、草野俊助、中村留二、田中信良」の十名である。b、c、d2では、さらに石黒忠篤が入つて、十一名である。石黒は、後述するように「内郷村の二日」という文を書いている。この文によれば、石黒は、「最後の二日だけ駆け参じた」¹⁴⁾とあり参加は確実である。この時期、米騒動がおこり、同じ農商務省の小平権一はそれへの対応のため参加できなくなつた。f、g1、g2は、参加者の特定の為には資料的に問題がある。

次に、d2では、小野武夫を加えている。受け入れの責任者の長谷川は、直前の打ち合わせの為七月二十八日に内郷に柳田と同行して来た小野を、参加者とし

する。肩書は、d1に基づいたが、「大正七年職員録」等により訂正した。年齢は各種人名録等による。なお「地理学研究」に大正十四年から十五年にかけて九回連載された「地理学に篤学な諸名士伝」では、牧口(第五回)、正木(第八回)、小田内(第九回)が紹介されている。また内郷調査を紹介した新聞雑誌等では、牧口の肩書は東盛小学校校長となつている。しかし、大正五年六月に大正小学校校長を兼務し、同年十二月には東盛小学校長の兼務を解かれていた。

氏名 当時の肩書(年齢) / その後

牧口常三郎 大正小学校長(四十七) / 郷土教育

理論の先駆者、創価教育学の創設者、¹⁷⁾
創価教育学会初代会長、創価大学を
構想

中桐確太郎 早稲田大学文科教授(四十五) / 倫

理学

草野 俊助 東京帝大農科大学助教授(四十四)

/ 東京帝大名誉教授、植物学、理学

博士

柳田 国男

貴族院書記官長(四十三) / 民俗学者として著名

小田内通敏

早稲田大学講師(四十三) / 郷土教育の推進者として著名⁽¹⁸⁾

正木助次郎

府立三中(現両国高校) 教諭(四十二) / 大正八年から昭和八年まで同中第三代教頭⁽¹⁹⁾

佐藤 功一

早稲田大学工科教授(四十) / 建築家として大隈講堂、日比谷公会堂などを設計

小野 武夫

海外興業会社員(三十五) / 法政大学経済学部教授・農学博士、農氏史、小作の研究で著名⁽²⁰⁾

石黒 忠篤

農商務省書記官(三十四) / 「農政の神様」のあだ名を持つ 農務局長、次官を経て農相

田中 信良

鉄道院参事人事掛長(三十三) / 名古屋鉄道局長のち関東州工業土地(株)

社長

今和 次郎

早稲田大学工科講師(三十) / 早大名誉教授、社会学者・建築学者、日本生活学会初代会長

中村 留二

農商務省技師(不明)

四 農村調査の研究成果の発表

(一)郷土会における報告会

九月二十一日午後五時より、新渡戸邸において行われた。柳田の日記によれば、草野、石黒、中村、小田内、正木、牧口、今、中桐ら会員の外に(内郷の)長谷川兄弟、「都会及農村」の山中省二その他三人が出席した。⁽²²⁾ 横浜貿易新報九月二十七日付には、この会に、新渡戸、草野、柳田、石黒、中村、中桐外多数列席し、「各自其調査研究の事項を詳細に報告したるが追つて各報告事項を一括して印刷に附し斯道研究者の参考として発表する筈なり」とある。

(二)論文の公表

大正十一年 今和次郎「一山村の住居に関する調査」『日本の民家』鈴木書店(岩波文庫としても、平成三年出版)

大正十四年 小野武夫「農村研究講話」改造社

大正十三年 鈴木重光「相州内郷村話」郷土研究社

(三)スケッチと写真

今の「内郷村にて見たる居住状態」には、「増原の家居住況」、「道志字南の南畑氏の屋敷の間取り」のスケッチが収められている。⁽²³⁾ 今和次郎全集第二巻『民家論』に収める際には、これに加え、「広い段丘上にできている山の村」、「農家の所有地全景」のスケッチも収められている。⁽²⁴⁾ 東京家政学院大学生活文化博物館が、平成九年十月一日から十一月十二日まで行った「内郷村と恩方村のいまむかし——今和次郎の世界を訪ねて」では、内郷村「増原」村落図(原図)と内郷村スケッチ(農家)が展示された。『都会及農村』には、「内郷村増原遠望」、「内郷村道志字南畑」の二点の写真が収められている。⁽²⁵⁾ 小田内が、

参加者の論文等は、主として『都会及農村』等に発表され、その後、単行本、全集に収められている。東京朝日新聞大正七年十二月二十二日の「学会消息」欄には、郷土会の調査した結果は、「白茅会のようにキチンと纏つたものではなかつたが『都会及農村』や『三越タイムス』で皆なが研究成果を発表した」とある。また、受け入れにあつた内郷村関係者の著作も見られる。

① 大正七年十一月から大正八年二月に雑誌『都会及農村』で発表されたもの

柳田国男「村を覗くとする人の為に」四回連載

今和次郎「内郷村にて見たる居住状態」七年十一月、十二月号

小田内通敏「内郷村踏査記」七年十一月号

石黒忠篤「内郷村の二日」七年十一月、八年一月号

② その他

大正七年 柳田国男「相州内郷村の話」『三越』

大正八年 長谷川一郎「内郷村の村落調査」『神奈川教育』一六四号

奈川教育』一六四号

「内郷村踏査記」を『聚落と地理』に収める際には、「道志の古い農家」、「山村の簡素な生活をあらわす厨」⁽²⁷⁾「村の主たる生業養蚕」、「山村内郷の特相」の四点の写真と約六万分の一の地図を加えている。⁽²⁶⁾

「相州内郷村の話」において、柳田は、「カメラも四五つありまして少なくとも百枚以上はちばちとやりました⁽²⁷⁾」と言っている。しかし、内郷村調査時の写真は、小田内が紹介している以外まだ見つからない。

五 内郷村農村調査における牧口の研究活動

本来、牧口常三郎には、『人生地理学』、『教授の統合としての郷土科教育』等の著作があり、また農村調査については、農商務省の委託による大分県津江三村の調査なども行い、柳田と道志村の調査旅行を行う等、農村調査には高い興味をもっているはずだが、内郷についての論文等は見当たらない。津久井郡郷土資料館に、鈴木重光の蔵書として『教授の統合としての郷土科教育』改訂八版（大正十二年）があつたが、牧口からの謹呈か、鈴木が購入したものか分からない。

内郷村における牧口について、小田内は「牧口君は主として交通策を調べられ、古道の分布やら現在の道路調査などを調査され⁽²⁸⁾」と述べている。しかし、「調査を行うに就いては、(略)教化及衛生は、牧口君中桐両君⁽²⁹⁾となつていたのに何故交通に変更したのか記載がない。

「内郷村踏査記」が、『都会及農村』で発表されたときに田中信良が交通となつていたので、のちに蚕室と改められた⁽³⁰⁾ことと関係あるだろうか。

内郷村における牧口について、聖教新聞社編の『牧口常三郎』では、今和次郎の聞き書きをもとに、次のように記述している。

「各人がそれぞれ計画的な調査項目をもつて詳しい採集、研究にあつたのであるが、牧口は、段丘と谷の複雑な地形の村に住む人々の「工夫力」はどうか、というテーマを選び、村人と同様の苦勞をして調査にあつてはいる。

日中は村内を巡り、夕方、宿舍となつて正覚寺に戻るとビールなどをかたむけながら、一日の成果を議論し合つた。特に、ある部落の場合、真ん中を流れ

る川の流れを利用して家々が建てられているが、その流れは人工的につくられたものなのか、それとも、もともとあつたものなのか、ということに議論が集中した⁽³¹⁾

当時、調査に加わつた今和次郎は、そのときのことを次のように語っている。

「牧口先生は、特に、この問題に非常な関心を示し、毎日その部落に行つては、山からの流れ口と段丘を逃げて去る個所の状況や、流れの中間付近の様子など熱心に調査を続けていました。結局、この問題については牧口先生が火付け役になつて、みんながそれにひきずられてしまつたようなかたちでしたね⁽³²⁾」

更に、一つの問題に取り組んだらどこまでも探求していく牧口の態度に接して「研究というものはこういうものなのか、と教えられました⁽³³⁾」と述懐している。因みに、今については、小田内は、「一行中日記を最もよくつけていたのは佐藤今両君で⁽³⁴⁾」と述べているので、今の話していることは、かなり正確な聞き書きと考えると良いと思う。

ここで、ある部落と川の関係が話題になつてはいるが、小田内も「内郷村踏査記」で、このことに触れている。

「朝出て夕方に帰り晚餐を済ましてからは、或は老農を訪ひに出るものもあるが、大概は其日の報告的談話に花さくが常で、思ひがけぬ議論が起るのも稀ではなかつた。増原の中央を貫流して小河が自然である人工であるかに就ては、二晩十二時過まで議論を聞はした珍話さへある⁽³⁵⁾」

柳田も東京朝日新聞の取材でこの事に触れている。「夫から議論もよく起つたが、或る時は村を貫いてる川は自然の流れであつて其岸に村が出来たといふ説と村に便利の爲め水を其処に引いたのだといふ説が出て大いに論じたが果てしが無いので翌日皆で其川に行つて見る、又論じるといふ調子で未だに釈然とせぬものある⁽³⁶⁾」

受け入れに當つた長谷川一郎も、このことが一番問題になつたと書いている。四人の話から、牧口がこの調査に積極的に係わり、部落と川の問題でも、議論をリードしていた姿が浮かんでくる。

村人がこの調査をどう見てたかについては、柳田が同じ朝日新聞の取材に「村では最初はお奉行様の巡視といった調子でとらえていたようだが、此の一行は毎日朝は露を踏んで夕は星を戴く迄村の小道や小川や林を尋ねて全て御室でも探すように石塊一つも見落とすまいという熱心さに村の衆は再度びつくりしたりしい⁽³⁸⁾」(趣意)と述べている。

また、内郷村の調査は、極めて熱心で参加者にとっても楽しい日々であった。柳田は同じ記事に「このように愉快で隔ての無い学生時代のような旅行をしたのは十何年ぶりだろう⁽³⁹⁾」(趣意)と述べている。それは、参加したメンバーに共通の感慨ではなかったかと思う。

六 マスコミの報道

東京日々新聞(現毎日新聞の前身) 神奈川版、東京朝日新聞、横浜貿易新報が継続して報道している。鈴木重光が切り抜いた新聞の切り抜きファイルが、津久井郡郷土資料館に残っている。

七行

リード 内郷村落調査 日本最初の試み

九月五日 東京朝日新聞 リード五行本文六十一行

リード 麩と南瓜の十日間 内郷村へ研究に行つた郷土会の御連中帰京す 村の衆を驚かせながら 出来上がった立派な地図

九月二十七日 横浜貿易新報 リード二行本文十四行

リード 内郷研究報告 新渡戸博士邸に開催 九月二十一日の郷土会の会合を記事に

七 農村調査の評価

終了後の柳田の評価は、「相州内郷村の話 某会の席上にて」に出てくる。

「同行の諸君の意見は未だちつとも承はつて居りませぬが、私だけの実験は、一言を以て申せば村落調査と云ふものは、非常に面白いと同時に、非常に六つかしい仕事だと云ふ、これだけであります⁽⁴¹⁾」

七月 十八日 東京日々新聞 リード三行本文八行
リード 学術的に内郷村の研究 以上研究会の一行
七月 十九日 横浜貿易新報 リード四行本文三十一行

リード お歴々方の農村研究 新渡戸博士を始めに柳田貴族院書記官長等 来月半本県津久井郡に出張して実地に其研究

*七月十七日に郷土会の会合が行われ、事前打ち合せが行われたことが書かれている

八月 十日 東京朝日新聞 リード五行本文二十二行⁽⁴⁰⁾

リード 一個の村を隅々まで研究する郷土会 此夏は神奈川県津久井郡内郷村に出張す

八月二十七日 東京日々新聞 リード四行本文六十三行

リード 十余名の学者に試みられし 内郷村の農村調査 日本では最初の試み 柳田貴族院書記官長の談

八月三十一日 横浜貿易新報 リード二行本文三十一行

本文の「同行の諸君の意見は未だちつとも承はつて居りませぬ」ことから、新渡戸邸で九月二十一日の研究報告会の前の話と思われる。この初出は、柳田全集によれば、大正七年の秋の雑誌『三越』付録と思われる。しかし『三越』は国会図書館に所蔵されているがその付録はない。

次に、「村を覗んとする人のために」にも出てくる。この初出は、大正七年十一月に出版された『都会及農村』三周年記念号 洛陽堂である。柳田は内郷村農村調査の結論として、「非常に面白かつたけれども、我々の内郷村行きは学問上先ず失敗でありました。面白かつたとは言ひ得ますが、有益であつたとは申しにくい⁽⁴²⁾」と述べている。

柳田が当初企画した総合的な農村調査報告書を作成することができなかったことから、これらの言にうなずける部分もあるが、柳田個人及び参加者の研究活動からみた場合、その研究活動に内郷の経験は大きな影響を与えているのではないか。今和次郎、小田内通敏においては、それぞれのフィールドワークの早い時期

- (17) 唐沢富太郎編『図説教育人物事典 上巻』七二二頁—七二四頁による。
- (18) 同四七四—四七六頁による。
- (19) 『両国高校八十年』『九十年史稿』による。
- (20) 『永小作論』によれば、大正七年以降農務局農政課の嘱託をうけて、永小作制度について専念研究したとあり、内郷以降本格的な研究活動に入っている。
- (21) 『都会及農村』第四卷十一号には、今は助教とある。柳田国男『大正七年日記』『定本柳田国男全集 別巻第四』筑摩書房 昭和三十九年 二九七頁
- (22) 今和次郎『内郷村にて見たる居住状態(二)』『都会及農村』第四卷十二号 十一、十二頁
- (23) 今和次郎『民家論』ドメス出版 昭和四十六年 表紙裏、二〇八頁
- (24) 『都会及農村』第四卷十一号 口絵
- (25) 小田内通敏『聚落と地理』古今書院 昭和三年 一四三頁、一五四頁、挿入写真
- (26) 前出『相州内郷村の話』五十五頁
- (27) 前出『内郷村踏査記』二十七頁
- (28) 同二十四頁
- (29) 前出『聚落と地理』一四四頁
- (30) 前出『牧口常三郎』六十頁
- (31) 同六十一頁
- (32) 同六十一頁
- (33) 前出『内郷村踏査記』二十七頁

- (1) 長谷川一郎『内郷村の農村調査』『神奈川県教育』一六四号 大正八年 二十一頁
- (2) 柳田国男『郷土会記録』大岡山書店 大正十四年 緒言一頁
- (3) 今和次郎『日本の民家』鈴木書店 大正十一年 初版の序一頁

注

のものとして単行本に収められている。小野武夫においては、その後農村研究、農民史、小作の研究成果を多く出している。さらに、一緒に行動し議論することにより地元の郷土研究家を育てた功績は大としなくてはならない。

最後に、民俗学者、井之口章次氏の言葉で締めくくりたい。

「(郷土会が)前記の人類学会と違っていている点は、現実の村落生活に即して、それぞれの見聞を話し合っていることであり、さらに神奈川県内郷村その他に、會員の共同調査をおこなったことは、学史の上でも特筆すべき、画期的な事業であった。」⁽⁴³⁾

- (4) 柳田国男『相州内郷村の話』爐辺叢書『郷土誌論』郷土研究社 大正十三年 五十七頁
- (5) 奈良了介『長谷川先生と内郷小学校』『石老の礎—長谷川一郎先生一周忌記念文集』昭和四十年 二十七頁
- (6) 原題『柳田国男・鈴木重光・長谷川一郎』『府中市郷土の森博物館紀要』第三号 平成二年三月が初出 松本三喜夫『内郷村への旅』『柳田国男と民俗の旅』吉川弘文館 平成四年 四十一頁
- (7) 『聚落と地理』第六版所収では、蚕室に変わっている。小田内通敏『内郷村踏査記』『都会及農村』第四卷十一号 洛陽堂 二十四頁
- (8) 前出『内郷村の農村調査』二十一頁
- (9) 長谷川一郎『内郷村共同調査の思い出』『神奈川県の民俗 鈴木重光先生古稀記念文集』昭和三十一年 小野武夫『農村研究講話』改造社 大正十四年 二十六頁
- (10) 聖教新聞社編『牧口常三郎』聖教新聞社 昭和四十七年 六十頁
- (11) 石黒忠篤『内郷村の二日(一)』『都会及農村』第四卷十一号 二十九頁
- (12) 鈴木重光『長谷川一郎先生を偲ぶ』『石老の礎—長谷川一郎先生一周忌記念文集』昭和四十年 三十頁
- (13) 前出『農村研究講話』一四三—一六二頁

- (35) 同二十七頁
- (36) 『東京朝日新聞』大正七年九月五日
- (37) 前出『内郷村の農村調査』二十一頁
- (38) 『東京朝日新聞』大正七年九月五日
- (39) 同
- (40) 『神奈川特報』欄の記事と思われる。
- (41) 前出『郷土誌論』五十六頁
- (42) 同六十九頁
- (43) 井之口章次『民俗学の方法』岩崎美術社 昭和四十五年 一五四頁

(しおはら まさゆき／創価大学職員)